

知るべきは 正解の背景

齊藤淳さんに聞く「いま必要な学力」

公教育そのものが揺れ動いて、変化の時代を生き抜くために必要な力とは何なのか。子どもは、何を学ばばいいのだろうか。

「アップルやグーグルに入社するためにどんな勉強をすればいいですか」
子どもにそう聞かれることがある。その子が大人になったとき、これらの企業が存在しているかどうかはわからないのに、必要なのは、「企業に入社する力」ではなく、「ゼロから考えて新しい価値を発見したり、つくり出したりすることができる力」。時代を生き抜く力の土台になるのがリベラルアーツ、つまり「教養」だ。

教養を身につけるには、専門にとらわれず自由に学ぶことだ。多くの専門は「政治学」で、イェール大学でも教えたが、大学生時代は五つのゼミを掛け持ち、あらゆる分野の学問を学んだ。高校時代に独学したコンピ



「10歳から身につく問い、考え、表現する力」(NHK出版新書)では、子どものためのリベラルアーツを語る。「人材」は誰かに使われる人。「グローバル人材」より「グローバルリーダー」育成が必要だ(齊藤さん)

ユーターのプログラミング言語は、研究で統計分析をする際に役立つ。洋画を見ながら英語のスピーキングを練習したことが、留学後に役立ったことは言うまでもない。すぐには使わな

くても、いつ他の学びや仕事とつながるかかわからないのだ。日本の教育制度でも、教養を身につけることは十分に可能だ。科目として総合学習の時間が設けられたが、そのような表面的なことではなく、実質的にどのように学ぶかをつぶさに分析する必要がある。日本の学生たちにとって、学びのゴール、つまり「学びの動機」は入学試験。学校の教養教育は、それと乖離したところにある。

正解か不正解かのペーパーテストで評価される癖がつくと、とにかく暗記をすればいいという学習態度が身につけてしまふ。他方で集団の学習に貢献することの意味は、ディスカッションの場で発言する経験を積むことで分かることが多い。日本人が国際会議で何も発言できないのは、ペーパーテスト至上主義の入試にも問題がある。答案に何を書くかでしか評価されないから、学びの共同体に貢献しようとする意識が育たず、非常に利己的な学習態度に陥りがちだ。

制度にのみ込まれない

教養学習の目標として、日本の子どもたちに以下の六つを身につけることをすすみたい。

- ① 母語で洗練された意思疎通ができる能力(読み書き話し聞く。日本人は読み以外が弱い)
- ② 一つ以上の外国語の高い語学能力(語学を習得すれば異なる価値観を知ることができる)
- ③ 数理的な推論を行う能力(少なくとも高校の数学と統計学の初歩まで。データを読み解く力、統計学の知識はどんな分野でも必要)
- ④ コンピュータープログラミングの知識(技術の進歩で淘汰される仕事が増えてくる。機械に仕事をさせるには、仕組みを理解しておく必要がある)
- ⑤ 一つ以上の専門分野を持つ(知識の最先端を垣間見る経験をする)
- ⑥ 人類の歴史に対する深い理解(世界の人々がそれぞれ過去にどのような葛藤を抱え、現在の価値観を得てきたかを知る)

これらを身につけるために、親や教師は子どもの「好き」という気持ちを否定したり、つぶしたりしないようにするべきだ。子どもは、自己肯定感を持ち没頭できるものをひとつ見つけると、そこから学びを広げられる。言い尽くされたことだが、親は子どもと会話する時間をできるだけ作る。親自身も謙虚に子どもと一緒に学ぶ姿勢を持つ。早押しクイズのような暗記と先取り学習合戦のような今の教育制度にのみ込まれず、一度立ち止まって、「正解の背景には何かがあるのか」を子どもと一緒に考えるのが、教養教育の第一歩になる。

構成 編集部 直木詩帆



上経大で教養のPREP代表でもある。1969年生まれ。上経大で教養のPREP代表でもある。1969年生まれ。上経大で教養のPREP代表でもある。